
二週目の勇者「俺」

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二週目の勇者「俺」

【Nコード】

N9053Z

【作者名】

ジャッカル東西田

【あらすじ】

最強の勇者としてゲーム世界に転生してしまった主人公であったが、既に大魔王も倒しエンディングも迎えてしまっていたので特になにもやることが無かった。そんな勇者のころは荒んでいき……

暇つぶしの午（ひる）（前書き）

主人公が外道です。

心温まる会話も展開も特にありません。

ファンタジー要素もあり……という胸糞悪くなる話なので、特別な性癖の方のみお進み下さい。特殊

暇つぶしの午（ひる）

「ひゃっはあー！種もみを隠そうったって無駄だぜえー」

世は大凶作時代。俺は叫んでいた。天にも地にも、誰にも恥じることなく。

鉄塊号（馬）の上に乗ったまま、必死に抵抗するヒゲを生やした爺さんから小汚い袋を奪い取る。

「ちッ！何だこれだけかよ？時化てやがんな」

袋の中身を確認し俺は鉄塊号から爺さんにツバを吐いた。

「お、お願いですじゃ。それは村衆が食べるのを我慢してなんとか用意した来年の為の種もみなのですじゃ！返して下され、返して下されー」

爺さんが俺のあぶみに手をかけてくる。チッうぜえな。

「あー分かった分かった。返してやるよ」

手に持った小袋を爺さんに差し出す。爺さんはホッとしたのか暴れるのをやめ袋に手を伸ばした。爺さんが袋を掴みかけたその瞬間

「フレイル！」

俺は炎術系魔術を発動。

袋はその中身ごと燃え上がった。

「ヒャーッハッハッハ？返してやったぜえ？お空になあ？」

呆然とする爺さんを尻目に俺は馬首を翻し荒野へと駆ける。

風が心地いい。

身を切るようなこの風が。

赤い岩棚、砂埃、植物も生えぬ大地。

（嗚呼、ここには余計なものはないに一つ無い）

そう感じながら

「勇者なんて……糞喰らえだ」

そう小さく漏らした彼の独り言は風の中に消えていった。

魔王との謁見（18度目）

「お待ち下さい。少しお待ち下さい？」

そんな声をかけてまわり付いてくる門番を無視し俺は扉を開いた。

「魔王ちゃーん、遊びに来たよ〜」

玉座に優雅に腰かけワイングラスを片手に持ったポーズのまま魔王は口からワインを噴出した。

「キツタネエな〜！あ、それはそうと部下に魔王城の掃除ちゃんとさせてる？埃が積もってたよ」

ひとしきり噎せた後、魔王はぎこちなく笑顔をつくる。

「ゆ、勇者殿。ほ本日はどのような御用件で我が城においでに？」

ビクビクとしながら聞いてくる。愛い奴め。

「なんだよ〜用がなけりや来ちゃいけねえのかよ〜？魔王と俺は親友じゃなかったのかよ〜？」

「い、いえ！そんなことは決して。勇者殿と我が輩は義兄弟の契りを交わしておりますればッ？」

ぶんぶんと首を降り否定する魔王。愛い奴め！

「ふ〜ん、そうか……ならコレ分かるよな？」

そう言つて俺は気を溜めた。この魔王城を一瞬で消し去るほどの闘気を。

それを見た魔王はガクガクと膝が震え王座から転げ落ちた。

側近である門番は口からブクブクと泡を出し気絶している。

「……ふう」

俺は展開していた闘気を身体の内抑え込み魔王に笑いかける。

「あ、あの勇者殿……これは一体なんな「アゲぼよ〜」！」ので

魔王が喋っている途中で俺は割り込む。

「はっ？」

魔王はよく聴き取れなかったのか間拔けな声を出した。

「おい『アゲぽよ』って言われたら『アゲぽよ』って返さなくちゃ駄目だろうがッ？」

「ヒイツ！」

俺の剣幕に怯える魔王。

「はあーっ……怒ってないから言ってみ？『アゲぽよ』って俺に返してみ？」

本来なら打ち首の所を聖母のような慈悲深い笑みで諭す。そんな俺の威容に打たれたのか

魔王はこくこくと頷くと

「あ、アゲぽよ……」

なんとか挨拶を返した。しかし

「違うッ？もつと元気よく！『ぽよ』の後ろに！（ビックリマーク）を三個付けるくらいな気持ちで？」

俺は頭を掻きながら指導。しばらく

「アゲぽよ……」

「違うッ？」

「あ、アゲぽよ……」

「ちよつと良くなった！」

「あげぽよ……！！」

「惜しいッ？『アゲ』は『あげ』にしなくても宜しい！」

「『アゲぽよ』……！！」

「それダッ？」

こんな風景が魔王城に出現した。

一息ついた後

「あの勇者殿、先ほどの『アゲぽよ』……」には如何なる意味が？やはり直前に勇者殿が凄まじい闘気を溜めておられたように極大呪文か何かの詠唱なのですか？」

魔王は心もちワクワクした様子でこちらに尋ねてくる。

（さて、どうしたものか？……ここまで期待している魔王に真実を話すのは余りに酷だ。しかしさりとて「これはスンゲー呪文なんだぜッ！」と欺くのも胸が痛い。ここは……）

「やはりイオナゾン級以上の破壊力なのでしょうなあ……いや、私も1時間以上勇者殿に特訓していただいた甲斐があるというものです！今から使うのが楽しみですな！ハッハッハッ？」
魔王の瞳は子どものようにキラキラと澄んでいた。

そんな魔王に俺は小さな声で

「……………ない」

「はい？勇者殿なんですか？」

一旦笑いを納め、こちらを見つめる魔王。その瞳が相変わらず綺麗に澄んでいたのでイラッと来る。

「意味など……………ないッ！極大呪文でもない。というか呪文ですらナイ？俺はもう帰る、不愉快だ？あとそれと怪物共にキッチンとこの城を掃除するように伝えておけッ！貴様の城の埃を吸い込んだせいで一秒でも俺の寿命が縮まったなら、貴様ら全員悪虐の限りを尽くし拷問にかけるからナ」

魔王にそう告げ腹パン。疼くまる魔王を置いて謁見の間を出る。

ムカムカしていたので、とりあえず魔王城の窓ガラスを釘バット状の武器『穢竇剥剌梦酢^{エルムスミス}』で叩き毀してから自宅に帰り、魔王からパクツた酒を片手に不貞寝した。

ダイヤの糞を捻り出せ！

「いいかッ！凡夫勇者パパの精液がシーツの染みになり、淫売僧侶ママの割れ目に残ったカスがお前らだ？じっくり可愛がつてやる、泣いたり笑ったり出来なくしてやるッ！」

東トルキス大帝国。その中にひとつしかない国立勇者士官学校の訓練用地で俺は教鞭をとっていた。

俺の座る『椅子』から

「ギギギギッ」

という歯軋りのような音が聞こえてくる。

「どうした『勇者見習い二号』改め『凡夫見習い二号』。苦しいのなら降りても構わんだぞ？」

orzのような態勢で俺を背中に載せた勇者見習いは叫んだ。

「レンジャイ？この程度何でもありません、レンジャイッ？」

日中の気温が35 を超えるなか早や2時間。なかなか根性のある凡夫だ。

「痛ぶり甲斐があるのは感心だ。初心者森に行つてゴブリンをフアックしてきていいぞ！」

「レンジャイッ？有り難う御座います！」

そう言つて勇者見習いは微笑みながら崩れ落ちた。どうにも限界だったようだ。

俺は週に二度、この国立勇者士官学校で特別教官などを務めている。まあさほど金になるわけではないが、イケメンリア充の上に生まれ落ちた瞬間神から祝福されたという才能溢れるフザケた勇者どもに『如何に自分が甘つたれた存在であるか？』

という挫折感を味合わせるのはいそれ程悪くはない。

努力すれば大抵の事が叶う人種に

「努力してもどうにもならぬことがある」

と教えるのは大切なことだ。

そうすれば自分よりも価値が下の人間に優しくなれるし、尊大で横暴な振舞いもなくなるからだ。

ゆえに俺は奴らを『クソ以下』として扱うのである。

「『魔物マラソン』程度にいつまで俺の貴重な時間を割く気だ？さ
ては貴様ら『勇者』ではないなッ？スライムのクソを掻き集めた値
打ちしかないッ？」

砂漠のような勇官校訓練用地。

熱い。そこに居るだけで灼熱のように暑い。

走ろうとすれば足が砂に取られ、また『蟻地獄』などの危険な怪物
も自生しているので本来は隊列を組んだ上でゆっくりと進むのが正
しい。

しかし、俺はそこをフル装備（フルアーマーで剣盾担ぐ）のまま4
0km走らせる。おまけに魔王から借り受けた魔物に勇者見習いど
もを追わせているのだ。

結果、阿鼻叫喚！

気絶する者、淫売僧侶に祈り出す者、逃走しようとする者も現れた。
そして、見事ゴールした猛者どもは俺の椅子にしてやる。

「貴様ら勇者が説く『友愛の心』だ！まさか仲間が未だ苦しんでい
るのに自分だけゴールしたから終わりなどと思っていまいな？」

そういうと大抵勇者見習いどもは

「ぐぬぬぬッ！」

といった後しぶしぶ俺の椅子になるのだ。

いやあ『友愛』って本当にイイもんですね！

更に1時間後

「死ぬか？俺のせいで死ぬつもりか？魔王は待っちゃあくれないぞ？とつとと死ねッ？」

かなりの人数がクリアしたが落ちこぼれどもはまだゴール出来ちゃいなかったたので発破をかける。

そしてなんとか全員ゴール。

勇者見習いどもは涙を流して全員で喜び合う。

「へへへ、あいつら胴上げまでしてやる」

熱い友情に俺の目にも感動の涙がちよぎれる。

ま、全員クリア出来なきや連帯責任でもう一度だからだけだな！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9053z/>

二週目の勇者「俺」

2011年12月29日20時49分発行